

2025年度大学入試の情報整理

国語 試作問題では大問数が増加 個別試験では試験範囲科目に注目

💡 共通テスト試作問題のポイント

現行の共通テストは4大問を80分で解く構成だが、試作問題では、「近代以降の文章」からの出題が2大問から3大問へと増加し、解答時間も90分に伸びた。第A問、第B問の2問は、いずれも「近代以降の文章」からの出題で、配点は20点。どちらも生徒の言語活動の場面が設定されており、文章・図表・グラフが複数提示され、それぞれを解釈する力や、関連づけて考察する力が求められた。現場からは、「時間配分の戦略と読解のスピードアップが重要」といった声が上がっている。

- 大問数、解答時間が増えた
- 図表・グラフを解釈する力が必要

🏰 個別試験の公表状況

国公立大学の個別試験の公表状況からは、試験範囲を『現代の国語、言語文化（古文、漢文からも出題）』とする大学・学部がある一方、『現代の国語、言語文化』以外に、『論理国語、文学国語、国語表現、古典探究』を含めて幅広く設定する大学・学部もあることが分かる（多く見られるのは、京都大学法学部前期日程、岡山大学法学部法学科前期日程のように、『現代の国語、言語文化、論理国語、文学国語、古典探究』を試験範囲に含むパターン）。志望する募集単位により、試験範囲を含む科目が大きく異なるため、志望校が設定する試験範囲に応じた対策が必要だ。

数学 共通テストでは少なくとも 「数学B」と「数学C」から1大問選択必須

💡 共通テスト試作問題のポイント

試作問題『数学Ⅰ、数学A』は、全問必答の4大問構成で、「数学Ⅰ」から4分野、「数学A」から2分野が出題され、配点は、「数学Ⅰ」が60点分、「数学A」が40点分。試作問題『数学Ⅱ、数学B、数学C』は、必答、選択それぞれ3大問で計6大問に解答。選択問題は、4大問から3大問を選ぶ。「数学Ⅱ」が52点分、「数学B」と「数学C」で48点分（選択問題が各16点）だった。第7問「平面上の曲線と複素数平面」は、「平面上の曲線」が4点分、「複素数平面」が12点分となった。

- 『数学Ⅰ、数学A』は4大問必答
- 複素数平面に高配点

🏰 個別試験の公表状況

国公立大学の個別試験の公表状況を見ると、文系学部では、「数列・ベクトル」を課す募集単位が約77%に上る。ただし、東京大学文科一類前期日程のように、「統計的な推測」（「数学B」）が加わる募集単位もある。また、理系学部では、「数列・ベクトル・平面上の曲線と複素数平面」を課す募集単位が約64%に上る。文理共通して言えるのは、「数学B」（「統計的な推測」を含むか）と、「数学C」（「平面上の曲線と複素数平面」を含むか）の出題範囲が、入試対策を考える上での鍵となるということだ。

未来を切り拓くために必要な資質・能力の評価に向けて、大学入試が大きく変わろうとしている。今回の本コーナーでは、2022年11月に公表された25年度大学入学共通テスト（以下、共通テスト）の試作問題と、国公立大学の新課程入試科目の公表状況（23年4月上旬時点）を踏まえた、注目教科の指導のポイントを紹介する。

2025年度大学入試の情報整理と、 情報、地理歴史・公民の指導のポイント

情報 多くの国公立大学が共通テストで情報を必須で課す 今後の配点情報の公表に注目

共通テスト試作問題のポイント

全問必答の4大問で構成。旧課程で多くの学校が履修していた「社会と情報」には含まれていない「コンピュータとプログラミング」、「情報通信ネットワークとデータの活用」の範囲に配点の多くが充てられていた。プログラミングは共通テスト独自の表記がなされ、コードは21年3月発表のサンプル問題よりも読み解きの難度が下がった。また、モデル化とシミュレーション、論理回路など、前回のサンプル問題では見られなかった分野からも広く出題された。問題の発見・解決の過程において、情報及び情報技術の科学的な理解に基づき思考・判断する力を見る設問が多く見られた。

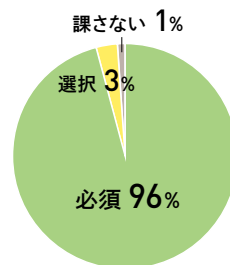
- サンプル問題では見られなかった分野からも広く出題された

共通テストの公表状況

国立大学の一般選抜では、96%の募集単位が共通テストで情報を必須で課す。わずかではあるが、夜間課程や特別プログラム、後期日程で、「情報を課さない募集単位」が見られる。また、現時点では、共通テストでの情報の配点比率は10%程度の募集単位が多い。情報を課すが配点しない大学も含めて、今後の公表内容に注目したい。

- 一般選抜で情報を必須で課す国立大学の募集単位

※該当情報の公表のあった2,476募集単位。



地理歴史・公民 科目の枠組み変更を意識した授業の実施が必要

共通テスト試作問題のポイント

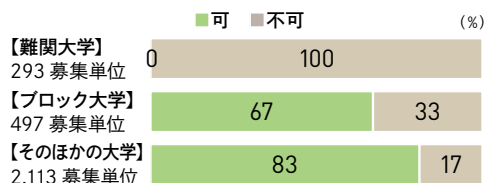
例えば『歴史総合、日本史探究』では、「歴史総合」単独の大問が出題された。配点は「歴史総合」が25点、「日本史探究」が75点だった。多くの学校で1・2年次に学ぶ必履修科目を、受験学年でどのように学習するかがポイントになるだろう。また、地理、日本史、世界史については、主題を設定して生徒が調べた内容をまとめる場面や、授業中に生徒同士で意見を出し合って考察する場面が扱われるなど、「探究活動」や「授業」を意識した出題が多く見られたことから、探究を意識した授業展開も重要になるだろう。いずれの科目においても、解答ページ数は増加した。

- いずれの科目も必履修科目の配点は25点
- 「探究活動」や「授業」を意識した出題が増加

共通テストの公表状況

地理歴史・公民は、6科目から最大2科目の選択が可能だが、『地理総合、歴史総合、公共』の選択可否は、大学や募集単位によって分かれる。『地理総合、地理探究』、『歴史総合、日本史探究』、『歴史総合、世界史探究』、『公共、倫理』、『公共、政治・経済』からの選択は、出願時の汎用性が高いと言えそうだ。

- 『地理総合、歴史総合、公共』の選択可否



※該当情報の公表のあった2,903募集単位。公表済みの難関大学は、北海道大、東北大、東京工業大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大、九州大。公表済みのブロック大学は、筑波大、千葉大、横浜国立大、新潟大、金沢大、信州大、岡山大、広島大、熊本大、東京都立大、大阪公立大。

次ページからは、情報、地理歴史・公民の現状を踏まえた指導のポイントを確認する

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

情報

従来の指導観を転換し、
生徒の学びを支援する



東京都立三鷹中等教育学校

能城茂雄

のしろ・しげお
同校に赴任して11年目。
指導教諭。情報科。

外部テストなどを活用し、
偏りのない定着を図る

共通テストで情報が課されることになり、生徒はこれまで以上に、学習指導要領の内容を偏りなく学ぶことが求められるようになりました。しかし、学校現場には、情報が専門ではない教師も多く、プログラミングなど、特定の分野を苦手とする教師も少なくありません。そうした現実を踏まえると、教師の得意・不得意によって生徒の理解に濃淡が生じないようにすることが重要です。

本校では、「情報I」の全範囲を網羅した外部テストである「Pプラ

ス(*)」を学年末に実施しています。私の授業を受けた生徒が、私が作問したテストで解答できるのは当然ですが、「Pプラス」では初見の問題を解くことになるため、弱点を発見することができません。

多くの学校では、「情報I」は1年次に履修しますから、学んだことを2年次以降にどう定着させるかも課題です。進研模試でも、2年生の3学期から、「情報I」が出題されるため、その対応として「情報I」の学習教材に取り組む機会も増えてくるはずですが、模擬試験を契機にそれまでの学習を整理し、苦手分野を把握することが大切です。

学校生活の中に
知識を活用する機会を

共通テストでは、知識の量ではなく、知識を活用する力や思考する力が求められます。そのため、情報でも、身につけた知識をほかの教科や高校生活で活用することが重要です。文化祭や部活動、探究学習などでの問題解決の場面で、1年次に学んだ情報の知識が使えることもあるはずですが、指導する教師としても、具体的な問題を解決するために情報の知識を使う機会を意図的につくりたいものです。

情報の知識を活用する機会をつくるためには、カリキュラム・マネジメントの視点で、生徒の学びについて情報交換することが教師に求められます。例えば、理科で「音」を学んでいるのなら、情報では波長の話をすることができますし、情報の授業で培った情報デザインの力を、他教科でも発揮し、磨きをかけることもできます。また、担任が日直日誌を見るなど、生徒が各教科で何を学んでいるのかを把握し、生徒に何が合つといった学びの共有が、教科を

超えて求められます。

情報が専門の教師がいない学校は、共通テストに向けて不安もあると思います。私は、教師が教えるだけでなく、情報が得意な生徒をアシスタントにして、生徒と一緒に授業を組み立てるような発想の転換も必要だと考えています。情報は、教師が生徒よりも常に先行していなければならぬ教科ではなく、生徒が教師を飛び越えていくことを歓迎すべき教科ではないでしょうか。答えを教えたり、解決してあげたりすること以上に、よい教材やテスト、そして学んだことを活用する機会を与え、学びを支援することが、情報では特に求められるのだと思います。

指導のポイント

- 教師の得意・不得意によって生徒の理解に偏りが生まれないように
- 身につけた知識を活用する場面を、情報以外の教育活動でもつくる

* ベネッセが提供する「デジタル・情報活用力」を測定するテスト。

地理歴史・公民

学び方や学ぶ目的を
生徒に深めさせる授業を



静岡県立小山高校
美那川雄一

みながわ・ゆういち
同校に赴任して3年目。
地理歴史・公民科。

試作問題のねらいをくみ取り、
学校でこそできる授業を展開

共通テストの試作問題では、『歴史総合・日本史探究』、『歴史総合・世界史探究』のどちらを選択しても、『歴史総合』においては日本史と世界史の両方が融合されて出題されています。生徒には、日本と世界の両方の歴史を融合して学んでほしいという思いがくみ取れます。

一方、『歴史総合』の教科書の内容を教え切れないという悩みを抱えている教師は少なくありません。歴

史総合は、近現代の歴史の大きな変化について、「近代化」、「国際秩序の変化や大衆化」、「グローバル化」の3つをテーマを、それぞれ私たちと結びつけて学ぶ科目です。求められているのは網羅的な知識の習得ではなく、テーマ史という視点で歴史を見ることですから、教科書の内容をすべて教えるのではなく、生徒によって学習の軽重があつてよいと考えています。

旧課程の科目と比べて学習内容が減っていない以上、授業の進度を速め、生徒に効率的に知識をイ

指導のポイント

- ✓ 知識のインプットだけでなく、学び方、学びの意味・目的を深めさせる
- ✓ 定期考査や模擬試験を活用して、授業のあり方を軌道修正する

ンプットしたいという考えも理解できません。しかし私は、授業では、学び方や学びの意味・目的など、生徒1人では深めることが難しい点を重視し、知識の習得は生徒自身に取り組ませたいと考えています。「革命は誰が起したのか」と教師が生徒に問いかけ、「知識層だ」、「いや、貧困層だ」などと生徒から様々な意見が出され、対話すると、生徒の中に自分なりの革命観が生まれます。そうした、学校でこそできる学びに、これからも力を入れていきます。

また、定期考査や模擬試験で定期的に生徒の学習状況を把握し、授業のあり方を修正していくことが、今後ますます求められるでしょう。

新課程に関する情報は、『ハイスクールオンライン』でお届けします！

- ・ 2025年度大学入試の各大学の公表状況についてまとめた資料を公開！
- ・ 過去のオンラインセミナーのアーカイブ動画・資料などを掲載！

一疑問や課題を解決！実践につながる！
新課程レポート
ベネッセ教育情報センター

『ハイスクールオンライン』トップページ > 新課程への対応 > 新課程入試からアクセス

https://bhsb.benesse.ne.jp/hs_online/sidou/shinkatei/nyushi/